

世田谷文学館 ニュース

SETAGAYA LITERARY MUSEUM



『ちゅーちゅー』2009年 ©宮西達也(「宮西達也ワンダーランド展 ヘンテコリンな絵本の仲間たち」出品)

館長の作家対談

酒井忠康(世田谷美術館館長・美術評論家)

館長の作家対談

ゲスト
酒井忠康
(世田谷美術館館長・美術評論家)

聞き手
菅野昭正
(世田谷文学館館長)

美術館の学芸員、館長として長く重責を担いながら、美術史、美術評論でも多くの業績をお持ちの酒井忠康氏をお迎えし、当館館長がお話を伺いました。

横丹半島の風土が育む人生哲学

菅野▼酒井さんは明治初期の日本美術史、特に西洋との関係が専門であると同時に、現代美術の様々な分野の批評を手掛けておられますよね。ご著書を拝見すると、文学の方面でも、厳しい、あるいはゆとりある文学者の動静を観察されています。それも美術と結びつける視点で幅広く観察しておられますが、そもそも美術、芸術に関心を持たれたのはいつ頃、どんな動機ですか。

酒井▼大学生の時です。高校の頃は全く関心がなく、一種の高等遊民というか、実質的な社会で将来仕事をしたという気がなくて。格好つけた

言い方をすると、哲学少年でした。

菅野▼その哲学少年が青年の時代には、どのような著作に関心があったのですか。

酒井▼いえ、本を読んで考えたわけではなく、生まれ持った一種のニヒリズムに陥ったというか。

菅野▼生活の中で、「人生とは何か」と、難しい問題をお考えになったわけですか。

酒井▼そうです。僕の生まれ育った北海道の横丹半島の風土には、そういう気持ちを抱かせるころがあります。人間の本質みたいなものを、段取りも無しにいきなり問いかけてくる文学者や詩人が出ています。吉田一穂のような、詩人でなければ人間か動物か、なんて極端な話になっていくような。

菅野▼なるほど。何年前に横丹半島の一先端まで行った途中、古平というところに吉田一穂の詩碑がありました。ずっと海を見晴らす場所です。今言われたように、何かものを思わせる雰囲気、

風土が感じられますね。

酒井▼一穂は網元の息子です。漁師は、「宵越しの金を持たない」ようなところがあって、ある意味で人生がシンプル。吉田秀和さんがエッセイで、一穂の東松原の家の四畳半の書斎は、最も美しい部屋の一つだと書いています。これには物が無いということも一つあって、秀和さんはこのシンプルさに憧れたんでしょう。僕が鎌倉の秀和さんの家に遊びに行つたとき、「僕は書斎に本を置きたくない」と言っています。本は別のところに沢山あるに違いないけど、原稿を書く時はできるだけいほうが仕事しやすいと。たぶん一穂への憧れがあったと、僕は見ています。

土方定一との出会い、文学者との交流

菅野▼お話がちどころに文学者との関わりのことになりましたが、一旦話を戻して、哲学少年が

けれど、要するに絶対的に感動したことから出発して、自分の感動の中に対象を巻き込むという批評ですね。『モオツアルト』(1946年)もそう。だから合わないでしよう、美術史家とは。

酒井▼全然。だけど先輩なので。面白かったですよ、土方さんもかなり気性の激しい人でしたから。僕の中で文学の人たちの出会いは、ほとんど土方さんを介したと言つても言い過ぎじゃないです。鎌倉の美術館にも沢山来たんですよ。大正期末のアナーキスト詩人の菊岡久利、よく問い合わせがあったのは本多秋五さん。それで土方さんは、自分の蔵書から「本多にこれをちよつと貸してやれ」と。平野謙さんのつながりで、「近代文学」の人たちとの接点が結構ありました。それから埴谷雄高、中園英助。土方さんは戦前中国に行つていて、北京にいた時はいろいろな連中が来て、その窓口になっていたようです。武田泰淳の『上海の螢』(1976年)は、その時代のことを回想した本です。武田さんとも非常に仲がよかった。

菅野▼あの年代の方々の生き方の、一つの例ですね。満州に行った人など、元左翼の知識人にたくさんいるわけですけど、そういう時代だったんですね。

酒井▼それと、代々木に竹内好さんの中国の会の事務所がありまして、土方の舍弟だということで、僕はそこに5、6年出入りしていました。「遊びに来い」というので行くと、竹内先生は一番上の上座にいらして、その両脇侍が橋川文三さんと尾崎秀樹さん。僕はその隣ぐらいいと、結構優遇されました。竹内さんがすぐく面白い人で影響を受けました。特に鲁迅に関しては。一言も鲁迅の話をしなないんだけど(笑)。

菅野▼研究会か何かですか。

酒井▼「中国」という雑誌を出していて、その編集会議です。僕も何本か書きました。

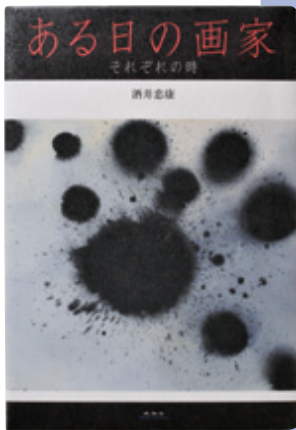
菅野▼中国の文学についてとか、中国の美術についてですか。

酒井▼美術の話を書けと言われて、あまり中国と

酒井忠康(さかい・ただやす)

美術評論・美術史家、世田谷美術館館長。1941年、北海道生まれ。慶應義塾大学文学部を卒業。1992年から神奈川県立近代美術館館長を務めた後、2004年から世田谷美術館館長。美術館連絡協議会理事長の重責を担う。

『開化の浮世絵師 清親』(1978年)他で第1回サントリー学芸賞を受賞。ほかに日本美術史論集『野の扉 描かれた辺境』(1980年)、『遠い太鼓 日本近代美術私考』(1990年)、現代彫刻論集『彫刻家への手紙 現代彫刻の世界』(1993年)、『若林奮 犬になった彫刻家』(2008年)、近著に『ある日の画家 それぞれの時』、『鍵のない館長の抽斗』(共に2015年)など。また、『日本の20世紀芸術』(東京美術倶楽部編、2014年)監修ほか全集等の編者、監修も多い。



『ある日の画家』2015年、未知谷



『鍵のない館長の抽斗』2015年、求龍堂

いかにして美術に眼を向けることになったのか。その転換の時のことを、どうしても何わないと収まらない(笑)。

酒井▼取まらないですか(笑)。これも本当に天命というか、何より鎌倉にある近代美術館(神奈川県立近代美術館)に就職したことが。

菅野▼それは何年ですか。

吉行淳之介さんをはじめ、クレーに関心を持つ作家はとても多い。酒井さん自身は、クレーはどうですか。

酒井▼決して嫌いではありませんが、僕はある時期から、自然が体感的に感じられる、それを物指しにできる美術、アウトドアの環境アートなどへの関心が非常に強くなりました。横丹半島出身の僕が、これなら勝負できると。

菅野▼ある時期というのはいつ頃ですか、きつかけがあるのですか。

酒井▼80年代の半ばぐらいからです。はつきり言えば知的コンプレックスです。やはり、都会育ちの子と十年の差があると思いました。これはかわないです。

菅野▼そういうものですかね。

酒井▼幼小の頃からの体験が違います。その代わり、自然と対話するコッは、僕のほうがずっと上だと。ある時、いざ本気で勝負する時には、美術史をやってきましたとか美術館にいたというのはなく、自分の物指しを持たなければと、つくづく感じさせられました。

菅野▼なるほど。それは美術館にお勤めになってかなり時間が経つてからですか。

酒井▼土方さんが亡くなった後ですから、二十数年経ってからです。

菅野▼土方さんに仕込まれた土壌があつて、その上で自分の翼で飛ぶと、そういうことですね。

酒井▼やはり、お師匠さんのやり残した仕事の一つ、二つは課題として持つてもいいかなという。菅野▼いいですね、そういう先生を持たれたことは幸せだ。

酒井▼本当に幸せでした。それと、最近情報は画一化して味も素っ気もない感じですが、美術館はいろいろな情報が行き交う場でした。土方さんが鎌倉にいた当時、土方さんのところには本当に面白い人がいっぱい来ていました。作家、絵描き、編



菅野▼年代的には土方さんは川端さんと同年代ぐらいですか。

酒井▼いえ、大体みんな年上で、永井さんとは一緒だったと思います。小林秀雄とは、お互いに少し何かある、という気がしました。

菅野▼小林さんと「肝胆相照らす」のは難しいでしょうね。

酒井▼小林さんの『ゴッホの手紙』(1955年)や『近代絵画』(1958年)などは、文学としてどうかはまた別として、美術の問題としてはあまり評価しなかった。

菅野▼小林さんの美術評論は、客体として見るということでないですね。彼の批評は全部そうだ



されたとか。

酒井▼詩を書くこうと思っただけです。……

菅野▼酒井さんは岡田隆彦のことを書いておられたことがあつたけれど、僕は彼の『史乃命』（1963年）という詩集にとっても感心しました。あの頃、慶應には吉増剛造とか、井上輝夫、朝吹亮二もいましたね。

酒井▼年代的には一緒で、僕が少し下ですが、ああいうエリートたちと全然比べられない。岡田隆彦さんとはとても仲が良いけれど、岡田さんは僕に、「お前は詩が書けないからいいな」って言ったことがある。

菅野▼詩を書くのは辛いということの裏の表現でしようね。同じように、僕は同世代の飯島耕一や大岡信に、「君は詩なんか書かないからいいよな」と言われたことあります。

集者、新聞記者……もうごちゃごちゃ（笑）それから鎌倉ではもう一つ、有島家との出会いが非常に大きいです。生馬さんのお嬢さんの暁子さんのところに遊びに何うと、そこにいろいろな研究者も調べに来ていて、僕が資料整理のお手伝いをしたこともあります。よくいらしていたのは、紅野敏郎さん。あとは稲垣達郎さんとか。思えば僕は美術からは外へは足を踏み出したことがなかったけれど、文学とのかかわりでは比較文学の芳賀徹さん、それから前田愛さんとも縁が深かった。



落ちこぼれの隅っこの面白さを

菅野▼ところで、酒井さんご自身も詩を書くこうと



ていたようです。

菅野▼高井有子とか岡松和夫とかが同人でしたね。酒井▼新星堂のご主人は、僕が比較的早い時間に行くと暇を持て余していて、「君は美術館にいるんだらう、文章も書くのか」と話しかけてきた。それから、「仲間に紹介するから、「犀」に入れ」って。僕、遠慮しました。その話をいつだったか高井さんに話したら、げらげら笑っていたけれど。

菅野▼その時に入っていたら、今ごろ小説家・酒井忠康は輝かしい名声を誇っていたかも。酒井▼それは無理ですね（笑）。僕は文学史とか文芸評論は書けないと思いますが、書けるかなと思う時が時々あるんですよ。

菅野▼文学評論は、書けるし、読みたいですね。酒井▼まともに荷風論を書くとかではなくて、例えば萩原葉子さんが三好達治のことを書いた『天上の花』（1966年）を読んだ時は、こういうことなら書けるかなと思いましたが、僕は中原中也の恋人だった長谷川泰子さんに、晩年知り合ったので、村上護さんの聞き書き、『ゆきてかへらぬ——中原中也との愛』（1974年）を読んだ時も、これならといっぱい、いろいろな人たちがいる。僕は批評したくないから批評家とは言えないけれど、何にだって落ちこぼれ

きますよ、画家があるんです。齋藤茂吉も達者。集め出したら……作家の絵の決定版展覧会ができるかもしれない。菅野▼福永武彦さん、上手ですよ。ところで、作家の高名さに負けないで、個々の作品の価値の選定はできますか。酒井▼いや、その辺の美術的価値の線引きは難しいところ。「文豪は、あるいは立派な批評家は何を描いてもいい」という前提に立たないと（笑）。菅野▼美術批評家の絵はどうですか。僕の大学の時の同級生、同学年に東野芳明がいたけど、絵は上手じゃなかったな。酒井▼彼は写真。水中写真の走りです。その写真でコペンハーゲンの現代美術館で個展をしたくらいです。

菅野▼他人がやらないこと、新しいことが好きな彼らしいですね。酒井▼文学と美術の乖離のことで、現代では妙にそれぞれ専門家になってしまった。「自立」という言葉が曲者で、美術は文学から自立すると謳っていた時に、自立じゃなくて無視しろ、となつてしまったのかな。例えば「君の絵は文学的だね」というのは貶す言い方になつてしまった。言葉って難しいですね。

菅野▼美術の専門家で、文学者ともこれほど沢山の交流をお持ちの酒井さんのような方がいらつ

文書院 徳島県立文学書道館 長崎歴史文化博物館 那覇市市民文化振興課 新美南吉記念館 日本近代文学館 日本現代詩歌文学館 姫路文学館 北海道文学館 前橋文学館 松本清張記念館 三島市郷土資料館 宮本三郎記念美術館 森嶋外記念館 山梨県立文学館 横光利一文学会 立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター 早稲田大学教育学研究科

▼「あけび」「宇宙風」「海」「海紅」「がいこつ亭」「風花」「かねこと」「カリヨン通り」「寒雷」「橄欖」「空想カフェ」「くさ

批評・言葉・芸術

た隅っこの面白さがあるじゃないですか。菅野▼本当に酒井さんは人脈が文学の方面でも広いというか、長谷川泰子までとはびつくりしますね。

酒井▼日本では美術の世界は、どちらかというと狭いかもしれませんが。菅野▼60年代くらいまで美術批評が無かつたわけではないけれど、新聞雑誌の他にはそれほど一般的な広がりを持つていなかったですね。酒井▼やはり文学のほうがいろいろな意味でずっと先んじていましたね。

菅野▼今はもう逆転していますね。それに、美術愛好家の裾野の広さに比べれば、文学は今低落の一途です。とにかく僕の感じでは、今、文学には「分かりやすさ」という神話があつて、それに牽引されていうか、引きずられている。今の若い人たちが書くものは、すごく柔らかになりすぎていると感じます。

酒井▼美術も世界的傾向としてそうですね、美術が生活の中に入るのではなく、逆に生活が美術の中に入り込んでしまった。文学もそうですね。

菅野▼そうかもかもしれませんね。だから、日常性と文学の世界の境界が消滅してしまっている。日本だけではない世界的な問題で、フランスでもそうです。以前はもつと受け手である優れた読者が、書く側にも見えていたと思います。少数かもしれないけれど、知的でいい読者が。

酒井▼そうですね。美術の批評でも、言葉で批評する仕方というのはとても難しいです。

菅野▼それからもう一つは、若い小説家で、小説は芸術だと思っている人は少ないのではないかと思えます。日本の場合、戦前の永井荷風にしても正



しやる。文学、美術の今のいろいろな状況を、文学館でも美術館でも少し意識しながら活動していかないと、という時期ですね。今日は長い時間ありがとうございました。

（2015年5月8日 世田谷文学館館長室にて）

2015年2月25日～6月4日

資料受贈報告

▼関口展様からタイガー立石あて植草甚一書簡2点、谷川俊太郎様から植草甚一書簡1点
▼阿部弘一様 大川弘子様 北村愛子様 小嶋洋輔様 清水義和様 遠役らく子様 宮崎潤一様
▼青森県近代文学館 荒川ふるさと文化館 石川武美記念図書館 浦安市郷土博物館 絵本学会 大田区立郷土博物館 小田原市郷土文化館 賀川豊彦記念松沢資料館 KADOKAWA 神奈川近代文学館 金沢文化振興財団 川

崎市市民ミュージアム 菊池寛記念館 北九州市立文学館 京都工芸繊維大学美術工芸資料館 群馬県立土屋文明記念文学館 國學院大学博物館学研究室 越谷市立図書館 野口富士男文庫 子規庵保存会 子規記念博物館 石神井公園ふるさと文化館 集英社 白百合女子大学言語・文学研究センター 全国文学館協議会 仙台文学館 川内まごころ文学館 館林市教育委員会 たましん地域文化財団 筑摩書房 遅筆堂文庫 鶴岡市立藤沢周平記念館 都留市ふれあい全国俳句大会実行委員会 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 東京都現代美術館 同

文書院 徳島県立文学書道館 長崎歴史文化博物館 那覇市市民文化振興課 新美南吉記念館 日本近代文学館 日本現代詩歌文学館 姫路文学館 北海道文学館 前橋文学館 松本清張記念館 三島市郷土資料館 宮本三郎記念美術館 森嶋外記念館 山梨県立文学館 横光利一文学会 立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター 早稲田大学教育学研究科

くき「九品仏川柳会句会報」群系「原型富山」「鴻」「心の花」「午前」「埼玉文学」「山河」「山暦」「春燈」「抒情文芸」「詩霊」「川柳研究」「臘」「玉川台つれづれ」「短歌研究」「短歌人」「丹青」「地中海」「長塚節の文学」「白」「プチ★モンド」「麓」「文藝軌道」「文藝飯能」「本のParking」「窓」「遊牧」「ゆく春」「ランブル」「りんごの木」「檸檬」の各誌ほかより資料のご寄贈、ご協力いただきました。ありがとうございました。

独特のタッチの絵と心温まるストーリーで知られる絵本作家・宮西達也(1956～)は、『おまえ うまそうだな』(2003年)や『おとうさんはウルトラマン』(1996年)をはじめとする多くの絵本を世に送り続けています。最初にテーマを決めてから制作に取りかかるという作品には、どこか不器用で心優しい主人公たちの迷いや奮闘が描かれ、子どもから大人までを惹きこむ魅力があります。

本展では、初めて文と絵を手掛けた絵本『どうしたのぶたくん』(1987年)の原画をはじめ、累計発行部数200万部を超えるヒット作「ティラノサウルスシリーズ」(ポプラ社)や、正

主 催	公益財団法人せたがや文化財団 世田谷文学館、朝日新聞社
後 援	世田谷区、世田谷区教育委員会
協 賛	野崎印刷紙業、東邦ホールディングス
協 力	アリス館、岩崎書店、えほんの杜、学研教育出版、教育画劇、金の星社、講談社、鈴木出版、チャイルド本社、ひさかたチャイルド、ポプラ社、ほるぷ出版、メイト、円谷プロダクション、ウルトラマン商店街、啓文堂書店、世田谷おはなしネットワーク

企画協力：TATSU屋 CORPORATION、渋谷出版企画

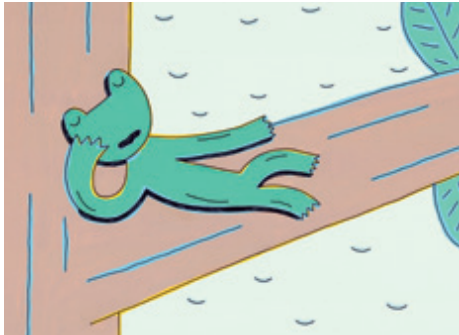
観 覧 料： 一般800(640)円／
65歳以上、高校・大学生600(480)円／
障害者手帳をお持ちの方400(320)円／
中学生以下無料
＊()内は20名以上の団体料金
＊7月31日(金)は、65歳以上の方は無料

おとうさんはウルトラマン スタンプラリー
会期中、「おとうさんはウルトラマンシリーズ」をもとにした館内スタンプラリーを実施します！
＊当日参加で参加費は無料。台紙がなくなり次第終了します。

義の味方がお父さんとして奮闘する「おとうさんはウルトラマンシリーズ」(学研教育出版)などの代表作を中心に、初期作品や秘蔵のラフスケッチなどを加えた250点余りをご紹介します。特別企画として「ティラノサウルスシリーズ」と「おとうさんはウルトラマンシリーズ」の初コラボレーション作品が登場するほか、ヘンテコリンでユニークな「宮西達也のワンダーランド」をお楽しみいただけます。



『おまえ うまそうだな』2003年 ©宮西達也



『カエルくんのおひるね』1995年 ©宮西達也

企画展

宮西達也ワンダーランド展 ヘンテコリンな絵本の仲間たち

7月25日(土)～9月23日(水祝) 2階展示室

当館収蔵品の紹介 54

深田久弥関連資料

現在も読み継がれ、山岳文学の中で燦然と輝く名作『日本百名山』。作者・深田久弥は、1903(明治36)年石川県大聖寺に生まれ、後年鎌倉文士として活躍するとともに、文芸誌に山の随想を発表しました。1955(昭和30)年に、世田谷区松原へ転居。ヒマラヤ文献を集めた書庫兼書斎の「丸山山房」には、多くの岳人が集い、山岳研究は『日本百名山』『ヒマラヤの高峰』へと結実しました。かねてより念願のヒマラヤやシルクロード遠征も果たしますが、1971年茅ヶ岳山中で急逝し、68年の生涯をとおしました。

当館は、「ジャンルを横断する文学館」として1995(平成7)年に開館し、同年に『日本百名山』の深田久弥と山の文学展」を開催いたしました。展覧会を契機に、研究者の堀込静香氏から関連資料(写真参照)をご寄贈いただき、その後、深田澤二氏から直筆原稿「河口慧海」チベツト旅行記『解説』を頂戴することとなったのです。

日本百名山

『日本百名山』は、「山と高原」(1959年3月号から1963年4月号)に50回(1回に2座を紹介)にわたり連載されたものを再編し、1964年7月に刊行されました。対象となる山を、その歴史や関連する詩歌から、あるいは、景観や著者自身の登山記からと様々な観点により紹介しています。小林秀雄は「著者は、山を人間と見なして書いていると言っているのだが、山が人間なみに扱えるようになるのには、どれほど深山の山々と実地につき合つてみなければならなかつたろう」と述べ、この著作を「山を対象にした独創

的批評文学」として称えました。本著は、第16回読売文学賞(1965年)を受賞しています。

選定についてまず私は三つの基準をおいた。その第一は山の品格である。誰が見ても立派な山だと感歎するものでなければならない。高さでは合格しても、凡常な山は採らない。厳しさが強さや美しさか、何か人を打ってくるもののない山は採らない。人間にも人品の高下があるように、山にもそれがある。人格ならぬ山格のある山でなければならない。

第二に、私は山の歴史を尊重する。昔から人間と深いかかわりを持った山を除外するわけにはいかない。人々が朝夕仰いで敬まい、その頂に祠をまつるような山は、おのずから名山の資格を持つている。山霊がこもっている。ただ近年の異常な観光業の発達は、古い謂われのある名門の山を通俗化して、もはや山霊も住み所がなくなっている。そういう山を選ぶわけにはいかない。

第三は個性のある山である。個性の顕著なものが注目されるのは芸術作品と同様である。その形体であれ、現象であれ、乃至は伝統であれ、他に無く、その山だけが具えている独自のもの、それを私は尊重する。どこにでもある平凡な山は採らない。もちろんすべての山は一樣でなく、それぞれの特徴は持っているが、その中で強烈な個性が私を惹くのである。

(『日本百名山』後記より)

現代に受け継がれる深田久弥の心

富士山が世界文化遺産に登録され、来年の2016年8月11日が「山の日」として国民の祝日になるなど、近年、山や登山への関心が広まっています。山は、人々のくらしと深くかわつてきました。ある時は、人々に恵みを授け、ある時は信仰の

対象として、私たちを精神的に支えてきました。

深田久弥はよく、「山のような人間にならねばならぬ。山のような文章が書けるようにならねばならぬ」と語っていました。深田の独創的な自

然観察眼と、信念により生み出された山の文学を通じて、この機会に、自分にとっての山とは、自然とは何かを見つめ直してもいいのではないのでしょうか。



深田久弥関連資料(堀込静香氏寄贈)

雑誌「創作月刊」(1929年2月号)、「文藝春秋」(1930年10月号、1932年11・12月号、1933年1・7・11・12月号、1934年5月号、1939年8月号)、「山と高原」(1960年11月号)、「JAPAN QUARTERLY Vol.XII No.3」(1965年)、深田久弥愛用の文鎮・とっくり、ソノシート「日本のメロディー 2」、深田久弥色紙「山ありてわが人生は楽し」

詩人・大岡信展

10月10日(土)～12月6日(日) 2階展示室

詩人として、また文学から造形芸術にまたがる気鋭の評論家として若くからその卓越した才能で頭角を現した大岡信。のみならず、古今の詩歌への造詣の深さ、フランスをはじめとした国外の詩や文芸にも通じ、言語の壁を超えた国内外の詩人、文学者との交流、「連詩」のような新たな詩の境地の開拓でも他に追隨を許さない活動を残してきました。本展では、その核となる「詩」の業績を詩稿、草稿、創作ノートなど貴重な資料で掘り下げます。さらに、古典から現代までの詩歌への深い教養を縦横に用い、広く一般に詩歌鑑賞の魅力を広めた名著「折々のうた」にまつわる資料をはじめ、同時代芸術家との交流を物語る資料、作品からもその多彩な活躍を浮き彫りにします。

監 修 岩本圭司(大岡信ことば館館長)、菅野昭正(世田谷文学館館長)

特別協力 大岡信ことば館

後 援 世田谷区、世田谷区教育委員会
観覧料 12面をご覧ください。



『記憶と現在』1956年 書肆ユリイカ

連続講座

大岡信の詩と真実

現代日本文学に大きな足跡を残した作家に多角的に光を当て、当館館長菅野昭正の企画による恒例の連続講座の今年度のテーマは、企画展開催を記念し、大岡信氏をとりあげます。詩人としては勿論、翻訳、批評と、古典から現代までの詩歌をはじめとした文学美術への深い造詣と慧眼で知られる大岡について、本人と交流のある講師をお招きし存分に語っていただきます。

10月10日(土) 高橋順子(詩人)
10月17日(土) 野村喜和夫(詩人)
10月24日(土) 対談
谷川俊太郎(詩人) 十三浦雅士(評論家)
10月31日(土) 長谷川權(俳人)
11月1日(日) 吉増剛造(詩人)

会 場 世田谷文学館 1階文学サロン
時 間 14時～15時30分
定 員 各回150名
参加費 各回500円

申込方法 各開催日の2週間前(必着)までに、往復ハガキに①講座名・開催日②参加者氏名(2人まで連名可)・住所・電話番号③返信面に代表者の氏名・住所を明記し、世田谷文学館「連続講座」係まで。



提供：大岡信ことば館

1講座につき1通ずつ。応募者多数の場合は抽選。5講座全てをお申し込みの方は、9月26日(必着)までに全講座受講の旨を明記ください。1枚の往復ハガキでお申し込みいただけます。

2014(平成26)年度事業一覧

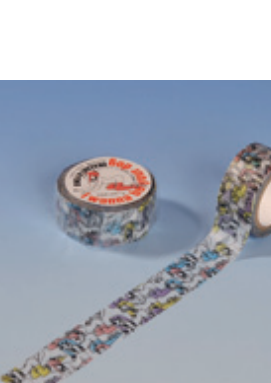
「茨木の子展」関連イベント		
5/17	記念対談 出演:谷川俊太郎(詩人)、小池昌代(詩人)	178
5/25	記念講演 講師:金裕鴻(NHK文化センター講師)	165
6/21、 6/22	記念コンサート 出演:沢知恵(シンガーソングライター)	385
「日本SF展・SFの国」展関連イベント		
7/26	おはなし「宇宙のヒミツ」 講師:名村栄次郎(JAXA)	71
7/26、 7/27	ワークショップ「小さな物語の作り方」 講師:江坂遼(作家)ほか	59
7/27	ロボット製作体験 講師:Joe Nagata	75
8/2、8/31、 9/6	100円ワークショップ「SFプラ板を作ろう!」	64
8/1	工場見学「製鉄所と造船所を体験しよう!」	20
8/2	『SFドラマ 猿の軍団』上映会(全2回)	152
8/2	『SFドラマ 猿の軍団』トークショー 出演:豊田有恒(作家)、斉藤浩子(ユリカ役)	126
8/3	『ウルトラマンギンガ』撮影会 出演:ウルトラマンギンガ	283
8/3	『ウルトラマンギンガ』上映会&握手会 出演:ウルトラマンギンガ	235
8/9	東京海洋大学見学「日本の海とエネルギーを考え る」 講師:刑部真弘(東京海洋大学大学院教授)	21
8/10	ワークショップ「世田谷ロケット」 講師:大嶋龍男(JAXA)	72
8/23	「エム教授の「人工知能」集中講義」 講師:松原仁(公立はこだて未来大学教授)	70
8/24	『ウルトラマンティガ』上映会(全3回)	170
8/30	『ウルトラマンティガ』上映会&お絵かき会(全3回)	198
9/6	「ホシヅルの日@SFの国」 出演:星マリナ(星新一長女)	101
9/7	記念トーク&ライブ 出演:浦沢直樹(漫画家)、難波弘之(キーボーディ スト・SF作家)	214
9/14	「筒井康隆先生朗読会」 出演:筒井康隆(作家)	205
9/28	対談「日本SFの未来」 出演:豊田有恒(作家)、夢枕獏(作家)	148
7/19-9/28	「日本SF展スタンプラリー」	5,104
「水上勉のハローワーク 働くことと生きること」関連イベント		
11/15	朗読会「水上勉を読む」 出演:声を楽しむ朗読会(代表:青柳恵) 解説:福島勝則(多摩美術大学名誉教授)	86

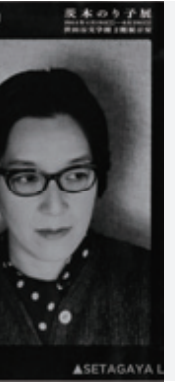
3. ライブラリー・講義室・絵本コーナー等	
施設	利用者数(人)
ライブラリー	9,250
講義室	3,217
絵本コーナー	8,337

4. 第4回世田谷区芸術アワード“飛翔”	
募集部門	小説・童話
応募点数	3

5. 文学資料収集・保管	
新規寄贈	2,159
2015年3月31日現在の収蔵品点数	97,657
特別観覧件数(撮影点数)	269

11/22	講演会「無言館の青春」 講師:窪島誠一郎(信濃デッサン館・無言館館主、作家)	178
「第34回世田谷の書展 世田谷ゆかりの作家たち」関連イベント		
1/9-1/12、1/14、1/17	鑑賞講座 講師:師田久子(日展会員)、泉原壽蔵(日展会員)、川口青澄(読売書法会理事)、後藤俊秋(毎日書道展審査会員)、稲村龍谷(日展会友)、池亀壽泉(読売書法会理事)	306
「岡崎京子展 戦場のガールズ・ライフ」関連イベント		
11/1	プレトーク 出演:桜沢エリカ(漫画家)、安野モヨコ(漫画家)、しまおまほ(漫画家)	181
1/25	上映会『ひなぎく』+ミニトーク 出演:山崎まどか(文筆家)	183
1/31	レクチャー「ニッポン戦後サブカルチャー史 岡崎京子特論」 講師:宮沢章夫(劇作家・演出家・作家)	187
2/15	ワークショップ「'90年代「ZINEをつくらう!」 講師:マンガナイト	73
2/28	ワークショップ「あみぐるみをつくろう!」 講師:タカモリ・トモコ(あみぐるみ作家)	28
3/7	ギャラリートーク 講師:今日マチ子(漫画家)	41
3/14	ギャラリートーク 講師:志磨遼平(ミュージシャン)	93
3/29	「小沢健二アコースティックコンサート」 出演:小沢健二(ミュージシャン)ほか	495
コレクション展「下北沢クロニクル」関連イベント		
3/28	シモキタトーク 出演:金子マリ(歌手)、KenKen(ベーシスト)	156
2-2. イベント:子ども文学館		
開催日	内容	参加者数(人)
どこでも文学館(展示)		
通年	世田谷区内小・中学校、区民センターなど	29,341 (22か所)
どこでも文学館(催事)		
4/19	子ども読書の日・講演会 教育センター	120
6/3	「歯固めの日に家族でチューインガムを作ろう!」 講師:ロケット中央研究所研究員	38
6/20	まち探検「芦花小学校2年まちたんけん」	47
11/30	アウトリーチワークショップ・六道山公園 講師:須藤正男(森林インストラクター・CONE指導者)	16
12/9、10、13	アウトリーチワークショップ・蘆花恒春園 講師:大竹英洋(写真家)	296
3/1	アウトリーチワークショップ・高幡不動 講師:須藤正男(森林インストラクター・CONE指導者)	40
6. 刊行物		
タイトル	判型/頁数	頒価(円)
世田谷文学館ニュース		
第57号4月	館長の作家対談:馬淵明子(美術史家・国立西洋美術館館長)/当館収蔵品のご紹介:芥川龍之介 斎藤茂吉あて書簡	A4/12 無料
第58号8月	館長の作家対談:半藤一利(作家・昭和史研究者)/当館収蔵品のご紹介:正岡子規 佐藤紅緑あて書簡	A4/12 無料
第59号12月	館長の作家対談:角田光代(小説家)/当館収蔵品のご紹介:石川淳『諸国崎人伝』原稿	A4/12 無料
展覧会図録等		
「茨木の子展」図録		A5/128 1,200
「日本SF展・SFの国」図録		A5/96 1,500
「日本SF展・SFの国」限定ミニブック『きつねこあり』 著:筒井康隆、星新一、小松左京		68×52mm/48 500
「水上勉のハローワーク 働くことと生きること」展ブックレット		B5/16 無料
「岡崎京子展 戦場のガールズライフ」図録(平凡社発行)		A4/394 2,484
子ども文学館報告書		
せたがや子ども文学館2014		A5/60 無料
7. 年間来館者数 ※一部イベント参加者は含まず		
	156,521人	

フライヤー・ポスター		
		
企画展 「日本SF展・SFの国」		
		
企画展 「第34回 世田谷の書展 世田谷ゆかりの作家たち」		
		
連続講座 「辻井喬＝堤清二 文化を創造する文学者」		
		
企画展 「岡崎京子展」マスキングテープ		

オリジナルグッズ		
		
企画展 「日本SF展・SFの国」チョコマシュマロ		
		
企画展 「第34回 世田谷の書展 世田谷ゆかりの作家たち」		
		
コレクション展 「下北沢クロニクル」		
		
企画展 「岡崎京子展」マスキングテープ		

世田谷文学館では、企画展のテーマ選定の指標のひとつを「文学展の幅を広げる新しい切り口、手法を開拓できる企画展」としている。2014年度は、文学館における展示の多様な可能性を例年以上に意識しながら取り組んだ年となった。

「茨木の子展」では詩の愛好者を超えて広く支持される詩人の生涯と作品を紹介。いかなる権威にも思想にも「倚りかからず」に生きた詩人の言葉はダイレクトに来場者の心に届いた。

「日本SF展・SFの国」では、手塚治虫、星新一、小松左京、筒井康隆、真鍋博らSF(サイエンスフィクション)第一次世代を中心に据えた800点に及ぶ膨大な出品資料により、文学の周縁から出発したSFが、映像やマンガ、アニメと結びつきながら独特の進化と浸透を遂げ、我が国を代表する一大文化ジャンルに成長したことを示した。

「水上勉のハローワーク 働くことと生きること」は、昭和を代表する作家の、前半生の職業遍歴という切り口から展示を構成した。作家にとって鮮烈な体験となった代用教員時代をイメージした教室の実物

大の再現や、当館で職場体験を行った中学生たちが執筆した解説パネルなどの意表をつく演出により、来場者がそれぞれに作家・水上勉の言葉と向きあう展覧会となった。

新春を飾る「世田谷の書展」では、現代書壇で活躍する世田谷区内在住書家が「世田谷ゆかりの作家たち」をテーマに新作を披露し、書と文学という異なるジャンルの芸術の懸け橋となる企画を継続している。「岡崎京子展 戦場のガールズ・ライフ」は、1980年代から90年代にかけて活躍しながら、不慮の事故により1996年から活動を休止している下北沢出身のマンガ家の初の大規模な個展として開催した。原画350点、関連資料200点の迫力と、岡崎作品の特色ともいえる力強い「言葉」の展示により、来場者の高い満足と共感をいただいた。

コレクション展の前期は「人生の岐路に立つあなたへ」と題し、作家たちが結婚や家づくり、リスクなど人生の局面をどのように生き、作品に描いたかを、収蔵コレクションの中から選び、紹介した。後期「下北沢クロニクル」は、音楽や演劇の街としても知られる下北沢にスポーツをあて、現代に至る下北沢の文化史の中に、坂口安吾や萩原朔太郎ら、ゆかりの作家と作品を位置づけようと試みた。

「せたがや子ども文学館」子どもと学校プログラム△は、世田谷区内の小中学校、区民センター、図書館などへの出張展示や地域と連携したワークショップ

を行う「どこでも文学館」を学校と施設で実施したほか、館内では「コトバのミュージアム」として、落語家ダンサー、詩人、歌人など多彩なジャンルの講師を招き、「言葉」をテーマとするワークショップを開催した。地域の歴史や文化を学ぶ野外ワークショップ「子ども探偵団」では、公募に応じた中学生ボランティアがリーダーとして活躍、小学一年生から、大学生、社会人ボランティアも含めた多世代が共に活動するプログラムとなった。

菅野昭正館長プロデュースによる連続講座は「辻井喬＝堤清二 文化を創造する文学者」を開催。小説家、詩人、実業家として活躍し、現代日本の文化に新しい領域を広げた辻井喬＝堤清二の仕事の全貌に迫った。資料収集では、寄贈資料2159点が新たに収蔵品に加わった。主な資料は齋藤茂吉原稿「白き山」、

短冊帖を含む茂吉関連資料102点。ほか、青山光二原稿、若岡芳樹原稿、上田五三石関連資料、椎名麟三草稿、創作メモ、下飯坂菊馬台本、山本嘉次郎関連資料、映画ポスターなどを寄贈いただいた。

ミュージアムショップでは、展覧会に関連した書籍や絵はがきの販売のほか、オリジナルグッズの開発を行った。「日本SF展・SFの国」では限定ミニブック『きつねこあり』、ホシヅル・鉄腕アトム・火の鳥などのキャラクターチョコマシュマロを「岡崎京子展」ではマスキングテープ、焼菓子の制作を企画、販売してご好評をいただいた。

当館は、2015年度に開館20周年を迎える。20年間に培った実績と反省を踏まえつつ「文学を体験するミュージアム」としてさらなる進化を遂げ、健全な地域社会の形成に貢献していきたい。

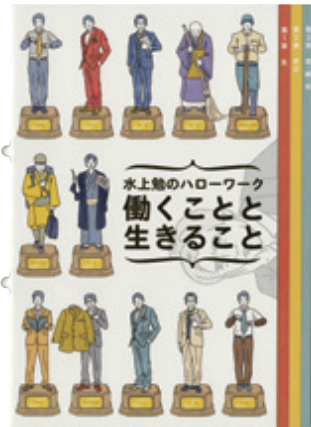


後期「下北沢クロニクル」



前期「人生の岐路に立つあなたへ」

コレクション展 展示風景



「水上勉のハローワーク 働くことと生きること」ブックレット



「日本SF展・SFの国」限定ミニブック『きつねこあり』 著：筒井康隆、星新一、小松左京



「日本SF展・SFの国」図録



「茨木のり子展」図録

刊行物



10月18日 連続講座「辻井喬＝堤清二 文化を創造する文学者」講師：小池一子



9月14日「日本SF展・SFの国」記念朗読会 出演：筒井康隆

イベント



「せたがや子ども文学館2014」報告書



「茨木のり子展」

企画展 展示風景



1月18日 子ども探検団「子ども百名山 音楽編」小仏城山にて



6月20日 まち探検「芦花小学校2年まちたんけん」

子ども文学館



「水上勉のハローワーク 働くことと生きること」



「日本SF展・SFの国」



3月1日 アートリーワークショップ・高幡不動 講師：須藤正男



11月2日 コトバのミュージアム「ことばとからだ」 リーダー：日本女子体育大学ダンス・プロデュース研究室



「岡崎京子展 戦場のガールズ・ライフ」



「第34回 世田谷の書展 世田谷ゆかりの作家たち」

企画展

宮西達也ワンダーランド展
ヘンテコリンな絵本の仲間たち

2015年7月25日(土)
～9月23日(水・祝)

2階展示室

観覧料:
一般800(640)円
65歳以上・大学・高校生600(480)円
障害者400(320)円
中学生以下無料
※()内は20名以上の団体割引
※7月31日(金)は65歳以上無料



詩人・大岡信展

2015年10月10日(土)
～12月6日(日)

2階展示室

観覧料:
一般800(640)円
65歳以上・大学・高校生600(480)円
障害者400(320)円
小・中学生300(240)円
※()内は20名以上の団体割引
※10月16日(金)は65歳以上無料



提供:大岡信ことば館

企画展		詩人・大岡信展	
宮西達也ワンダーランド展 ヘンテコリンな絵本の仲間たち ～9月23日(水・祝)		10月10日(土)～12月6日(日)	
8月	9月	10月	11月
コレクション展 特集・戦後70年と作家たち ～9月27日(日)		特集・戦後70年と作家たちⅡ 10月10日(土)～2016年4月3日(日)予定	

コレクション展

「特集・戦後70年と作家たち」

2015年9月27日(日)まで

「特集・戦後70年と作家たちⅡ」

2015年10月10日(土)～2016年4月3日(日)

1階展示室



観覧料:一般200(160)円 大学・高校生150(120)円
小・中学生100(80)円 65歳以上・障害者100(80)円
※中学生以下は土・祝・日は無料 ※()内は20名以上の団体料金

休館日:
毎週月曜日(ただし月曜日が休日の場合は開館し、翌日休館)

開館時間:
10時～18時
(ただし展覧会入場は
17時30分まで)

交通案内
京王線「芦花公園」駅
南口より徒歩5分
小田急線「千歳船橋」駅
より京王バス(千歳烏山
駅行)利用「芦花恒春園」
下車徒歩5分



公益財団法人せたがや文化財団

世田谷文学館 SETAGAYA LITERARY MUSEUM

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10

Tel. 03-5374-9111 Fax. 03-5374-9120

ホームページ <http://www.setabun.or.jp/>

せたがや文化財団の催し物

■世田谷美術館 [Tel. 03-3415-6011]

- 金山康喜のバリ
—1950年代の日本人画家たち
7月18日(土)～9月6日(日)
- 生誕100年
写真家・濱谷浩
—もし写真に言葉
があるとしたら
9月19日(土)～
11月15日(日)

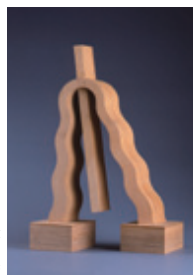
濱谷浩《田植女》
[白萩、富山]
1955年



ミュージアム
コレクションⅡ

- おもしろいかたち・
いろいろ
8月1日(土)～
12月6日(日)

建島寛造
《WAVING FIGURE-10》
1984年頃 撮影:上野剛宏



■世田谷美術館分館

向井潤吉アトリエ館

[Tel. 03-5450-9581]

- 向井潤吉の民家 絵画と写真
8月8日(土)～12月6日(日)

■世田谷美術館分館

清川泰次記念ギャラリー

[Tel. 03-3416-1202]

- 清川泰次と昭和
8月8日(土)～12月6日(日)

■世田谷美術館分館

宮本三郎記念美術館

[Tel. 03-5483-3836]

- 宮本三郎 写真家との対話
8月8日(土)～11月1日(日)

- 第3回 宮本三郎記念デッサン大賞展
11月8日(日)～12月6日(日)

■世田谷文化生活情報センター

世田谷パブリックシアター

[Tel. 03-5432-1526]

- 『Needles and Opium 針とアヘン
～マイルス・デイヴィスとジャン・コクトーの
幻影～』
(英語上演・日本語字幕付)
10月9日(金)～
10月12日(月・祝)
作・演出:ロベール・ルバージュ

●現代能楽集Ⅷ

『道玄坂綺譚』

11月8日(日)～
11月21日(土)
企画・監修:野村萬斎
作・演出:マキノノゾミ
出演:平岡祐太、倉科カナ、
眞島秀和、一路真輝 ほか



■世田谷文化生活情報
センター 生活工房

[Tel. 03-5432-1543]

●7つの海と手しごと vol.6

「インド洋とスンバ島の

ヒンギノラウ」

8月28日(金)～
10月4日(日)

●世田谷区芸術

アワード受賞展

「雨のち傘のちCASA PROJECT」

10月10日(土)～20日(火)

■世田谷文化生活情報センター

音楽事業部 [Tel. 03-5432-1535]

●せたがや音楽プロジェクト Vol.5

戦後70年…『音楽は自由を目指す』

9月19日(土) 14時開演

世田谷区民会館

出演:尾崎ブラザーズ ほか

●室内楽シリーズ

「堤剛&練木繁夫

デュオ・リサイタル」

10月12日(月・祝)

14時開演

成城ホール

出演:堤剛(チェロ)、

練木繁夫(ピアノ)



堤剛

©鍋島徳恭

練木繁夫

©大窪道治